

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32429

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K17517

研究課題名（和文）統合失調症患者に対する精神科看護師の「褒める声掛け」に関する科学的検証

研究課題名（英文）Scientific Verification of "Verbal Praise" by Psychiatric Nurses for Schizophrenic Patients

研究代表者

菊地 淳（Kikuchi, Jun）

日本保健医療大学・保健医療学部看護学科・准教授

研究者番号：90739632

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は統合失調症患者への退院支援として、看護師の「褒める声掛け」が前頭葉の血流や認知機能にどのような影響を及ぼすのかを検証することを目的とした。長期入院中の統合失調症患者23名を対象に言語流暢性検査中の前頭葉のOxy-Hb量を測定した。「褒める声掛け」の介入を受けた被験者では左前頭葉の有意なOxy-Hb量の増加が認められた。また、褒める声掛けによって統合失調症患者の認知機能の変化を検証するために、19名の統合失調症患者に対して統合失調症認知機能簡易評価尺度日本語版(BACS-J)を実施した。「褒める声掛け」の介入によりBACSの下位検査である、言語流暢性課題のみ有意な改善が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究結果によって、統合失調症患者の認知機能の改善への看護援助の方法について検討の可能性が示された。精神科看護師の患者への「褒める声掛け」は単に日常的なコミュニケーションスキルではなく、統合失調症患者の前頭葉を賦活化させ、認知機能の改善にも影響することが考えられた。精神科看護師の看護技術としての「褒める声掛け」行為は、専門性の高いスキルであることが示され、退院支援を促すためには精神科看護師の看護援助は不可欠である。そのため、本研究結果は意義が大きいものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the effects of "verbal compliments" given by nurses on the blood flow and cognitive function of the frontal lobe as discharge support for patients with schizophrenia. We measured her frontal lobe Oxy-Hb levels during a verbal fluency test in 23 long-term hospitalized schizophrenia patients. A significant increase in her Oxy-Hb amount in the left frontal lobe was observed in subjects who received the 'verbal praise' intervention. In addition, in order to verify the changes in cognitive function of schizophrenic patients due to praise, 19 schizophrenic patients were given the Japanese version of the Schizophrenia Cognitive Function Assessment Scale (BACS-J). Only the verbal fluency task, a subtest of BACS, was significantly improved by the 'verbal praise' intervention.

研究分野：精神看護学

キーワード：褒める 精神科看護師 統合失調症 認知機能 脳血流 NIRS

1．研究開始当初の背景

我が国の統合失調症患者における平均在院日数は、546日と平成14年以降は大きな増減はみられておらず、入院の長期化に対しての支援が急務である(平成26年患者調査)。

そのため、精神科看護師は長期入院患者の退院意欲を引き出すために、地域生活のイメージを持たせる関わりから、退院意欲を高めていたことを申請者は明らかにした(菊地ら,2016)。しかしながら、退院へと繋がらない患者も多く、その要因として、福田ら(2009)は、統合失調症患者が地域での生活を営むためには、認知機能障害の改善が必要であり、日常生活機能と最も関連があると指摘している。地域生活のイメージを持つためにも必要な能力である。認知機能の改善には、作業療法や社会生活技能訓練、認知機能改善療法(以下CRT)といった心理・社会療法があり、欧米をはじめ各国でその効果が検証されている(Wykes,2011)。しかしながら、統合失調症患者の多くは、長期入院の弊害により新たなプログラムに取り組むことへの不安が強く消極的になりがちである。また、抗精神病薬によって報酬系の機能も抑制されるため治療への動機付けが困難であり、意欲をさらに減退させている(紅林,2015)。そのため、CRTなどの心理・社会療法の導入・継続するためには、患者の出来ていることを褒めるなどの声かけが必要である(岡村ら,2013)。

精神科看護において褒める声かけ行為は日常的な看護として実践されており(成嶋,2014)、申請者の調査においても「患者のできていることや活動への参加そのものを肯定的にとらえ褒めている」という精神科看護師からの具体的な褒め方についての知見が得られている(菊地ら,2018)。一方、近年、褒められることと脳機能についての検討も行われている。Wonら(2013)はfMRI内で被験者に計算問題を行わせて正解すると‘great’or‘good’などと褒めのメッセージを送ることによって、脳機能の活性化が認められたと報告している。また、Izumaら(2008)は、健常者に対してfMRIを用いた実験結果から、他者からの良い評判は報酬としての価値をもち、前頭葉の血流量が増加することを明らかにしている。これらの先行研究は、「褒める」ことで前頭葉を賦活化させることを示唆した報告である。また、前頭葉の賦活化は、認知機能の改善とも関連しており(Clémence & Dominique, 2016)精神科看護師が統合失調症患者へ「褒める声掛け」をすることで前頭葉を賦活化させ、認知機能の改善になるのではないかと考えた。

2．研究の目的

本研究では、これまでコミュニケーションの一環としてのみ注目されてきた「褒める」という行為についての科学的検証を目的としている。以下の2点について明らかにしていく。
研究 「褒める声掛け」が前頭葉血流量の増加に影響するのかを検証する。

研究 「褒める声掛け」を継続した前後での認知機能の変化から「褒め」の効果を検討する。

3. 研究の方法

以下の適格基準に従って、対象者をリクルートした。

1. DSM - IV にて統合失調症と診断され、1年以上入院を継続している患者とする。研究協力者が所属する医療施設の施設長に対して書面と口頭にて調査協力依頼を行う。
2. 選定方法は、本研究の目的、意義に賛同した施設側にリストアップしていただいた統合失調症患者に調査協力依頼を行い、書面で同意の得られた患者を本研究の対象者とした。

〔方法〕研究

- (1) 研究参加に同意を得た統合失調症患者 23 名、健常者 37 名を対象に言語流暢性課題中の前頭葉の Oxy-Hb 量を測定した。
- (2) 前頭葉の Oxy-Hb 量の測定には 2 チャンネルの光トポグラフィ装置 (Near-Infrared Spectroscopy : NIRS) を使用した。
- (3) 介入群への「褒める声掛け」として 「すごいですね、けっこう言えていましたね」「 個言えていましたね。平均以上です。」 「色々と考えてくれたんですね。特に なんて思いつくのはすごいですよ。」 いっぱい考えてくれてありがとうございます。」 「すごく考えてくれたのがよくわかります。」と順番に伝えた。

研究

- (1) 研究参加に同意を得た統合失調症患者 19 名を対象として、介入 (褒める声掛け) 前後に統合失調症認知機能簡易評価尺度日本語版 (BACS-J) を実施した。
- (2) 「褒める声掛け」の介入は病棟看護師へ依頼した。そのため、介入方法について事前に説明をした。

対象者は病棟患者全員であることとし、調査対象の患者は個人が特定されないようにした。

褒める方法については、1. 患者が現在出来ていることを評価して褒める。2. 患者が過去に出来ていたことを評価して褒める。3. 患者自身の良い面を認めて褒める。

以上の 3 つの視点で日常的に患者へ声掛けを依頼した。

本研究は、日本保健医療大学の倫理委員会の承認を受けて実施した。

4. 研究成果

研究 「褒める声掛け」が前頭葉血流量の増加に影響するのかを検証する。

健常者対象において、実験群、統制群において Oxy-Hb 量の変化量は、左チャンネルでは、実験群 0.18mmMm、統制群は \square 0.09mmMm であった。Mann-Whitney の U 検定により褒める声掛けの介入による有意な血流量の増加が認められた ($p=.008$)。

統合失調症患者対象でも同様に左チャンネルでは、実験群においては、0.2mm・Mm、統制群は \square 0.4mm・Mm、Mann-Whitney の U 検定により ($p=.003$) 褒める声掛けの介入による有意な Oxy-Hb 量の増加が認められた。左チャンネル、言語流暢性課題においては健常者、統合失調症患者共に有意な変化は認められなかった。

研究 「褒める声掛け」を継続した前後での認知機能の変化から「褒め」の効果を検討する。

褒める声掛け前後の統合失調症認知機能簡易評価尺度日本語版(BACS-J)の結果、総合得点は、介入前-4.4、介入後-4.0 と 0.4 ポイント増加したものの、有意差は認められなかった。しかしながら、BACS-J の下位検査である、意味・文字流暢性課題では、介入前-2.9、介入後-2.0 と 0.9 ポイントの増加があり、Mann-Whitney の U 検定により ($p=.005$) 褒める声掛けの介入による有意な認知機能の改善が認められた。

研究 と研究 を通して、「褒める声掛け」といったポジティブフィードバック、あるいは言語的賞賛は統合失調症患者の前頭葉を賦活化させることへの可能性が示唆された。また、それは、統合失調症患者が地域生活を営むために必要な、認知機能の改善にも影響する結果となった。精神科看護師による「褒める声掛け」行為は、一般的なコミュニケーションスキルに留まらず、統合失調症患者の認知機能を改善させる援助行為に繋がる。今回の研究では、長期入院中の統合失調症患者を対象にしたが、地域へと移行し生活を営んでいる統合失調症患者についても、認知機能の改善への援助は不可欠である。今後、対象を広げ、被験者を増やしたさらなる研究が必要と考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 菊地 淳, 板橋 直人, 吉岡 一実	4. 巻 9巻2号
2. 論文標題 精神科看護師による統合失調症患者への褒める声かけに関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ヒューマンケア研究学会誌	6. 最初と最後の頁 65-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菊地 淳
2. 発表標題 褒める声掛けが看護大学生に与える影響 NIRSによる脳血流量からの検討
3. 学会等名 39回 日本看護科学学会学術集会講演集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊地 淳
2. 発表標題 精神科看護師の褒める関わりによって起こる患者の行動変容についての文献研究
3. 学会等名 日本保健医療行動科学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊地 淳
2. 発表標題 褒める声掛けが統合失調症患者に与える影響 NIRSによる脳血流量からの検討 -
3. 学会等名 33回日本医学看護学教育学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------